

今月のことば

善人ばかりの
家庭は
争いが
絶えない

龍谷大学非常勤講師

小池 秀章
こいけ ひであき

「善人ばかりの家庭は、争いが絶えない」

何だか、おかしい言葉です。普通なら、「悪人ばかりの家庭は、争いが絶えない」となるはずですが、一体どういうことでしょうか。

ここである善人とは、本当の善人ではなく、「自分が善人だと思っている人、自分がいつも正しいと思っている人」のことです。そのようにとらえると、争いというのは、善人と善人の間で起こることということがわかります。自分が正しいと思っているもの同士が争っているのです。自分は間違っているけど、文句を言ってもやろうという人は、あまりいません。自分が正しくて、相手が間違っていると思うから、争いになるのです。戦争も正義と正義が戦っているのです。自分が正しいと思っている国同士が、戦っているのです。

親鸞聖人は、自分のことを煩惱具足の凡夫（煩惱だらけの愚かな人間）と言われています。それは、決して自分を卑下して言われているわけではありません。仏さまのひかりに照らされて（教えを聞いて）明らかにになった、偽らざる自分の姿のことなのです。

「私もあなたも、正しい時もあれば間違える時もある。ともに煩惱具足の凡夫である」と受け止めることができた時、争いを減らしていく方向への一歩を、踏み出すことができるのではないのでしょうか。

合掌